俳句酒業中

～毎日が巡礼～

久行宗匠を紹介する「俳句四季」

午前五時前、まだ薄暗いのに、まるで時計のように毎朝、前の山のひぐらしが鳴き始める。リーダーから全員の鳴き声に変わると、ベッドから抜け出し庭に出る。花のほとんどは妻が集めたものだが、毎朝、水をやるうちに愛着を覚えるようになった。

近くの幼児がラジオ体操の帰りに、小さな池の金魚を見るために立ち寄る。「おじちゃんちの庭は花がたくさんあるね」。お世辞を言わない幼児のこの言葉はうれしい。その花を目指して毎日のようにクロアゲハがやって来る。

夏の季語「夏の蝶（ちょう）」はクロアゲハなど派手で大形の蝶を指し、春の季語の「蝶」とは違う。

夏の蝶といえば、久行保徳氏の「阿浮奈絵の二階へふふと夏の蝶」が頭に浮かぶ。

七十を過ぎるまで俳句などには全く無関心。ところが、日刊新周南の月曜連載の「走れ！おばさん」の中村光子女史から「私たちの句会に参加しませんか」と誘いを受けた。「はの字もわかりません」と言うと「私も素人。でもお酒を飲みながらの句会…」、この酒にひかれて昨年九月から参加している。

「呆花句会」。二カ月に一度、小料理屋の一室に十一人が集う。元市長、元高専教授、女性空手の名手、画家、教師などのちゃんこ鍋。そのメンバーの一人が久行氏である。「宗匠」とは呼ぶが、会費を払って参加される。会費というより飲み代といった方が正確だ。

私は久行保徳氏が俳人として有名な方ということも知らなかった。俳句を勉強している知人の女性に句会のことを話すと、翌日「俳句四季」という句誌が送られてきた。そこに久行氏の「阿浮奈絵の…」の句が載っていた。

句誌を送ってくれた彼女は、私が現役時代、近代日本文学評論家で梅光の佐藤泰正先生を招いて月に一度、下松市のザ・モール周南で「KRYかたつむり大学」を開いていた時の受講生。

佐藤先生は素晴らしい方だが、彼女は私まで素晴らしいと大きな勘違い。日刊新周南に巡礼記を書いていると知るや、わざわざ購読を始められるなど、物ごとを肯定的に受け止め、人を褒める。「久行先生とご一緒の句会なんて、藤屋さんはすごい」となる。

横道にそれたが、久行氏は句誌「草炎」を主宰され、先日、草炎三百号の祝賀会に句会のメンバー全員が参加した。

そこで彼女が「すごい」という意味がやっと正しく理解できた。

久行氏は山口県現代俳句協会長をするなど俳句の世界ではトップの俳人。ど素人の私が同じ会費を払って酒を飲みながら席を同じくするような俳人ではない。スーパー・ウーマンの中村女史の勧めとはいえ、怖いもの知らずもはなはだしい。私のファンのような彼女はそれを「すごい」と表現したのだろう。

ともかく、世界一短い定型詩は難しい。祝賀会のステージにもあった「阿浮奈絵の二階へふふと夏の蝶」。阿浮奈絵が危絵（あぶなえ＝浮世絵の一般的なものと春画の中間のきわどい絵）の当て字と知り、我が家を訪れるクロアゲハが遊女にも思え始めた。形式的だと思った季語も生活の中にあるようだ。

酒はほどほどにして早く俳句を楽しむという境地になりたいものである。

祝賀会での句会の仲間の皆さん